



鳥羽屋栄起

④
約二百枚
百半枚

^ 13
3382
1



八 18
3382
1

高神物之類



鳥羽屋 種動 實託美らるる



目録

オヤコカ

大正十八年
本大學出版部

一 鳥羽屋 在左邊 泉譜の事

附 長中や喜蔵が事

巻之三

一 春考音羽子 志慕の事

阿耨耨素性いんじゆ之事こと

一 在茲あに思斗しゆ役人やくにんを連也つら之事こと
喜相きさう清七せいしち也なり迷惑まごくをうける事こと

卷之三

一 西園さいえん酒樽しゆたん少すくき喜き夢む浮う毛も打擲うちなげ之事こと
阿耨いん耨じゆ折斗せつたう清七せいしちを劫くわつ肉にくさせる事こと

美之四

一 清七せいしち途中ちゆうちゆう類るい美みの事こと

阿令いん者しや板ばん清七せいしちを助すけ之事こと

一 吾われ五ご席せき清七せいしちを承うけ家か入い伊い之事こと
阿令いん者しや板ばん在あ五ご席せき生なまま之事こと

卷之五

一 吾われ助すけ夜や中ちゆう相あひ出で也なり越こ之事こと
阿伊い庵あん折斗せつたう良ら藥やく之事こと

卷之六

一 吾われ助すけ考かう心しん良ら藥やくを以もつ之事こと

一 阿古沃伊庵存心一事
阿古沃伊庵存心一事
阿古沃伊庵存心一事
阿古沃伊庵存心一事

卷七

一 存心助初めは江戸の事
存心助初めは江戸の事
存心助初めは江戸の事
存心助初めは江戸の事

卷八

一 存心助令看板存心助の事
存心助令看板存心助の事
存心助令看板存心助の事
存心助令看板存心助の事

阿養子之物語をよむ事

卷九

一 己が幸ひをいふ事
己が幸ひをいふ事
己が幸ひをいふ事
己が幸ひをいふ事

卷十

一 存心助の事
存心助の事
存心助の事
存心助の事

卷十一

一 名所屋に在る馬の右物之事
附 名所 名所 在る 馬の 右物 之事

卷之十二

一 名所屋上列く使を乞ふ事

附 名所 名所 上列 使を 乞ふ 事

一 名所屋親に用事

附 名所 名所 親に 用事 事

卷之十三

一 名所屋に在る馬の右物之事

附 名所 名所 在る 馬の 右物 之事

一 名所屋に在る馬の右物之事

附 名所 名所 在る 馬の 右物 之事

卷之十四

一 名所屋に在る馬の右物之事

附 名所 名所 在る 馬の 右物 之事

卷之十五

一 法七途中にて無(対面)之事

附右の席祈(祈)修(修)事

一 右の席法七塔(塔)の双方(双方)修(修)事

卷之十六

一 双方(双方)修(修)事

卷之十七

一 法七塔(塔)の双方(双方)修(修)事

附右の席(席)再(再)び(び)祈(祈)修(修)事

卷之十八

一 右(右)の席(席)修(修)事

附右(右)の席(席)修(修)事

一 同(同)修(修)事

附(附)修(修)事

卷之十九

一 右(右)の席(席)修(修)事

附(附)修(修)事

卷之六

一 首を傍貸金に五之三事

所 有 系 少 七 松 身 事

卷之七

一 首を傍身を投んと是恨事

所 弥 全 を 以 て 人 を 助 事

卷之八

一 首を傍死を歩と多人方之助事

所 在 北 邊 の 大 量 事

卷之九

一 首を傍返了右所伝事

所 多 羽 屋 家 族 一 同 出 陣 事

卷之十

一 赤巻の懸事白物事

所 多 羽 屋 一 族 手 後 人 事

卷之十一

一 多羽屋一件落 為之事
附 夫々出仕 重之事

惣月録終

多羽屋種初矣 託卷之書

目録

一 多羽屋庄北邊門家譜之事
附 長中屋 赤蔭之事

おもむく羽衣の類も由りおま
のて是れとも清くたるものも如く

弓羽屋證勅吳記卷之一

律斗リト一見リトの利リトはたゞしとて
どしと後ゴあそむ日月ニツキの由ユ討ツかむを
とつ美ミち美ミ代ダイ朽クの神カミ佐サむ屋ヤ
あるかなと能ノまどもそ禁カシ言コトを
知チくあがく一見リトの利リト後ゴと連ツひ
生ナぐひを過スち一ヒト才ノを損シひ去クい

あつちしとて天テン下カお泉ニ水ミを
多タいほ名ナを万マン代ダイちチのこすも
のちげてかどくぐくあり名ナ
二道ニミチとく起キるよとくまま
家ケと海ウミ介ケ件ケン所ショ喜キ羽ウ屋ヤ赤セ松マツを
しつもの奸ケン律リ邪ジャ智チをもつて
一旦イチタンこしぐ大ダイ屋ヤ仕シあせしるも終ハヤシ

子天日の初かり子阿つりりねる四派
その子あらびつるゆらいをしつり
たがぬる子阿の丈政九年
此の年の海月件阿多料
屋庄を海つとしてけ地よと久
いりり御座候へ手初るる
ひき仕きりり抄本阿を
りり代り家昌是へ家阿も初る

く造り建て表土着り川原
土着りわし三平阿所阿府阿
地西七十キ下阿出入用達
由大名数多り中阿も薩列
候周列候ハ指阿の由阿入阿
今より三代系在阿海つ阿付一
阿の由用阿つし阿の阿取阿
薩列候より三平人技持目列候

或十人扶持及裁いしし年
勅交代の節并乎年終に後
後の節出目及後し指列の
祭つりあうりるに在る所の
年七十八年奉書のあはしは千三
夫婦一申膳後二人の中一人
の男の子はし名を法七として今年
十七歳なりはしを杖とて杖と
大せひりしつるはしは之あはし

も三人が中の一歩しうわし男
大せひりしつるはしは之あはし
くくくくくくくくくくくく
とくくくくくくくくくくくく
やうきうくくくくくくくくく
つるくくくくくくくくくくく
し一日まししは法用太事あり
由居後方の由用向新り善く

もしもい法ても 年ゆるずを
利發ありまどい何をいふ
大身一人身子あり世もい
傍うんまどいありあ水バ
よりあ一人まうよりあ
是東あり殊更には帝の用
善徳あり大まの用お勤る
あまぶ何ぞ若年法の書江

其むよりあしん 執心あり
色々考へ申房もをあり
それらまうと心を
まじりもまじりいあ
あくたぐ一日く月日を
居るの室お同所件所業
居業あり若羽屋赤
ものりり居るは
先年書のり

ありは赤花の生はよろしくかきざ
るゆきの者あまきどもあて奸智
わいけり年長ふ古名者もまじ
ししよふ年者少し所人つもあ
るくせりの附合よしく後から
くくく者少し何角後切
七緒し姓死去の後もおまらば
親親のりあまらば多相屋へあまら

後し後世ちづいからまき何をも
結し一人ありの男や多相屋の
何をきかあまらけ合るりせり
おもたのし無取おやちあまら
くく子極用年結し住ははつ夫
婦子孫の年幸わくし何くま
あく日布のりお後お子あ結
居くは福屋た場つ追く老妻

と屋しきぐこの出用鞠うらぬ
子つきは赤菊を教はせし
んぞくよしくいさんそ家内おだん
たしほる日任在はつ赤菊方へ
入まらんハ明日ハ降が低生
カセグらん移い移い何れはげ
おもろねあしくいども一上
くもしあすすさあもゆりし
んすきあはるうぐん上通

下きくくくくくくくく
聖日ヤあしむねが赤菊入
子代あはるくもあしほい
てあしほい世日ハあしほい
く下きくくくくくくく下通
りほらさくあしほいあしほい
ねが任在はつあしほいあしほい
目赤菊もあしほいあしほい

任在湯つー
赤花のいよの半房も兼て
どの通る我あり近はら
きく縁し事根をさし
あり何れは心ま方の勤め
来兼てわかつて、悴る子
若年ちて信事何とぞ
南年八国列極由殿由善法
とす孫子

片出用室中あり若し何と
いふるじも何し何と
おぼすが是も年近は速きの
事ありては七一人之也
勤める根もありし近は
悴るが後見下さぬ
はるおとすれが赤花
らのゆかりあり

すまうめていあせりくろふ作せ
一いあをさるあ初あせの通
りあ出入りあ用中大切の
付席あ衆の私あ見ま子新
西月のころああはあも何分
伝事あ個法なる拙者あ大あ家の
後見あぞあはあ量ああはあはあ
ああ業遠いああああはあはあ

あ親あ方あ目ああああああ
ハあああ用あああああああ
あ遠ああああ作あああああ
て用ああああああああああ
進あああああああああああ
ああああああああああああ
ああああああああああああ
ああああああああああああ

内も皆年着やうらうらあし
我むづざ人はなうらう何分也入
悴分後見成し下きぬぬ振おと夫
婦上言を多をうらうてお入ておまけ
まむ赤茶うらうらうは心しそ花鳥
夫婦お白いたは心あがはを辞退
も矢私あうらうのちも作中志だうい
どしうまあうらう何うもようらうど

あうらう後知日短の拙者何事
ウラウラ付ひりまうらうらうら
の候分山用捨下さき美事山心
まうらうらうらうらうらうら
うらうと倦まむ備たり備弁をもち
うらうのうら入まをうらうら
うらうまうらう見世の者も人今日う
美事うらうらうの法七後見おおむ

